

畑作業が育む子どもたちの絆

主幹 中村 昌子

初夏を思わせるような毎日となりました。各学年の遠足や移動教室が続きますが、仲間と共に楽しい時間を過ごした子どもたちがより一層、絆を深め始める頃にもなります。

さて、5月13日（水）、前日に季節外れの台風で、強い風や激しい雨に見舞われましたが、翌日は台風一過の青空が広がり、生活団活動の畑作業がスタートしました。当日は30度に迫ろうというほどの暑さになりましたが、生活団ごとに自分たちの畑を一生懸命に耕し、野菜作りのための準備に取り組む子どもたちの姿であふれていました。6年生は手慣れた手つきで、大きなスコップを上手に扱い、次々と土を掘り返していきます。その土を小さなシャベルで下級生たちがさらに細かくしていくのです。中に入っている小石を取り除いたり、雑草を片付けたり。時には土の中から見つけた何かの幼虫に夢中になって、6年生から注意を受けてしまったり…。でもそんな光景もほほえましい一場面です。

この大泉小学校では、昭和13年の開校以来、土にまみれ、額に汗してはたらく子どもの姿が、本校の教育を特色づける「泥臭さ」として受け継がれてきています。開校当時は学校の西側の道路を隔てたあたりにも畑が広がり、そこを借りて大根やサツマイモ、麦など多くの作物を栽培していたそうです。左の写真は当時のサツマイモ作りの様子です。現在の大泉学園駅北側の学園橋付近で水田を借り、お米も育てていました。昭和30年代に入って宅地化の波がこの大泉の地にも押し寄せ、学校の農園も校内だけに限られるようになってしまいました。それでも先生方が苦勞して新しい畑をふやし、野菜作りの伝統は守られてきました。



この日、本当に厳しい暑さの中でしたが、誰一人「いやだ」とか「めんどくさい」とか弱音を吐くこともなく、黙々と取り組む姿には感動さえ覚えるほどでした。なぜ、こんなにも真摯に畑作業に取り組むのでしょうか。それは、この伝統が言葉ではなく、働く姿として



子どもから子どもへと受け継がれているからなのです。何よりも6年生がリーダーとして、働く姿を示しています。

「のどが渴いたら水分補給をしっかりするんだよ」と下級生を思いやる態度を示しています。しかし、これは教師が指導しそうさせているのではなく、生活団活動の中でずっとあこがれて見てきた先輩の姿から学んでいるものなのです。

重たい肥料の入った樽を必死に運ぶ6年生の傍らで、うれしそうにそこに手を重ねる1年生。そこに生まれる絆こそ、大泉の子どもたちを育む原点です。これから種や苗を植え、農作業も本格的になります。秋には子どもたちの絆が肥料となっておいしい野菜が実ることでしょう。

